

シンポジウム

コーディネーター

齊藤 孝(さいとう たかし)

パネラー

内田 伸(うちだ のぶる)

大正11年7月山口県山口市生まれ。法政大学工業学校建築科卒業。山口市教育委員会、山口市職員を経て、現在、山口市歴史民俗資料館長。多年にわたり社寺建築・石造美術・民話伝説の研究調査を続ける。

主な著書・論文 「山口県の石造美術」「大村益次郎文書」「雲谷庵の雪舟」など。

矢富 巖夫(やどみ いずお)

昭和4年1月島根県益田市生まれ。島根大学教育学部卒業。益田・津和野・益田工業の各高等学校教諭などを経て、現在、益田市雪舟の郷記念館長、益田市文化財専門委員。主に益田市の歴史・民俗・文学などを調査研究している。

主な著書・論文 「雪舟」「柿本人麻呂」「石見神楽」など。

渡辺 文雄(わたなべ ふみお)

昭和22年9月大分県南海部郡浅海色町(現：上浦町)生まれ。大分大学経済学部経営学科、岡山大学法文学部哲学科(美学美術史専攻)卒業。岡山大学大学院修士課程(美学美術史専攻)修了。現在、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員。主に宇佐・国東を中心とした大分県内の仏教美術を調査研究している。現在、豊後高田市在住。

主な著書・論文「古寺巡礼 富貴寺」(共著)「狩野光信様式論」「伝土佐光茂筆大分柞原八幡縁起絵巻について」など。

守安 (もりやす おさむ)

昭和26年11月岡山県総社市生まれ。岡山大学法文学部哲学科(美学美術史専攻)卒業。同大学院文学研究科美学美術史専攻修了。岡山県立井原高校教諭、岡山県立博物館学芸員などを経て、現在、岡山県立美術館学芸員。主に岡山県内の近世絵画を調査研究している。

主な著書・論文 「総社市史美術編」「漫画岡山の歴史『雪舟』『浦上玉堂』」「雪舟の誕生を地をめぐって」など。

司会

皆様お待たせをいたしました。

雪舟サミットの最後はシンポジウムでございます。

コーディネーターは、先ほど記念講演をしてくださりました岡山大学教授の齊藤孝先生にお願いいたします。

4名のパネラーの方々を交えて、「各地域における雪舟」というテーマでお話をいただきます。

それでは、パネラーの皆様方を御紹介させていただきます。

まず、山口市歴史民俗資料館長、内田伸様です。よろしくお願いいたします。(拍手)
島根県益田市雪舟の郷記念館長、矢富巖夫様です。よろしくお願いいたします。(拍手)
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員、渡辺文雄様です。よろしくお願いいたします。(拍手)

岡山県立美術館学芸員、守安 様です。よろしくお願いいたします。(拍手)

それでは、斉藤先生よろしくお願いいたします。

斉藤 孝(岡山大学文学部教授)

先ほど斉藤が雪舟に関しまして一通り一般的な御紹介をいたしましたわけですが、私も触れましたように雪舟は各地方において非常にいろいろな足跡を残しておるわけでございます。そのようなそれぞれの土地から代表の方々がお見えくださっておりまして、それぞれの土地の雪舟像というものをより具体的に、私の申し上げたことをさらに肉をつけていただこうと思います。

順番と申しますか、どういう地域からしたかということは、雪舟の生涯におきまして、次々と順番に彼の行きました土地が移っていきますので、いふなれば彼の生涯を追うということも含めて、そのような順番で取り上げて、それぞれの方にお話ししていただこうと思います。

そうなりますと、もとより最初は誕生地はこの岡山県の総社市でございますので、総社から誕生した雪舟が京都へ上がって修行し、そして山口へ至るとというのが一つございます。その点につきましては、まず守安 さんからお話を進めていただきたいと思います。よろしく。

守安 (岡山県立美術館学芸員)

それでは、私の方から雪舟の誕生地のあたりにつきましてお話と申しますか、御報告をさせていただきます。

さて、雪舟さんという方は、皆さんもよく御存知のとおり大変有名な画家でありますし、私もお名前については、子供のときから耳に親しいと申しますか、よく聞いておりました。それは、ひとつに私が生まれましたのは総社市の国分寺の近くの上林、旧三須村にあたりますから、雪舟の生誕地といわれている赤浜の山一つ越えたところなんです。同世代であれば、同じ幼稚園、小学校に通うことになったはずで、そうしたこともありまして、彼、雪舟さんにつきましては昔から関心を持っていたのです。

ただ、美術史を勉強することになりまして、いざ雪舟さんについて調べようとする、これはいろいろな問題点があってわかりにくい人だなという印象が強くなってきたわけです。雪舟の作品につきましては、その当時の画家と申しますか、彼のお師匠さんでありました周文だとか、さらにその先生であった如拙だとか、あるいは雪舟と同じころに活躍した人たちと比べますと、確かによくわかっているということになります。しかし、彼の生涯を丹念に追いかけてみようとする場合、必ずしも判明していることばかりではないということに気づくのです。

そこで、岡山県に伝わっている資料なども使いまして、雪舟が生まれたところや、宝福寺との関係はいかがであろうとか、これから少しお話をさせていただきたいと思います。

お手元にB4のプリントを1枚お配りいたしております。これが今日の資料ということになりますので、それを見ていただければと存じます。

雪舟が西暦でいいますと1420年に生まれたということにつきましては、史料的に十分確認できます。これは先ほどの斉藤先生の御講演の際にも何度も名前が出ておりました国宝の「山水長巻」の最後のところに、自分はこの絵を文明18年(1486)に制作した年齢は67歳であると記しています。それから、これもお話にありましたが、お弟子さんの宗淵さんに渡した国宝の「破墨山水図」にも制作した年と雪舟自身の年齢とが書いてあります。そういったことで、西暦の1420年に生まれたということが確認できるんです。そして、同じように史料的な裏付けをとりますと、亡くなったのも87歳であったということがわかってきます。ですから、雪舟はその87年間の生涯をどのように送ったのか、過ごしたのかということがこのシンポジウムでの問題になるわけです。

彼が生まれた1420年という年は、その当時の記録によりますと大変な干ばつの年、飢饉の年でありました。そして、諸国の飢えた人たちが都に集まって物乞いをするというような状態だったようです。そのほか、たまたまその年に兵庫県の西宮あたりを通った朝鮮使節の方が残している記録にも、やはり病人やこじきが道端にいて、通る人に物乞いをしていたということが出ております。したがって、雪舟が生まれたころ、恐らくこのあたり、すなわち総社周辺でも大変な災害に襲われて、みんなが困った困った、苦しいなあと騒いでいたんだろうと思います。

生まれた年のことは分かった。それでは、生まれたのはどこなんだろうというところに進みますと、お配りしたプリントの 番と 番を見てください。 番を読みますと、『如拙の画に後に跋する』 之慧鳳という禅僧が書いたものです。この人のことは先ほど出しましたが、寛正5年(1464)に山口にいる雪舟を訪ねた人です。お断りしておきますが、ここまで雪舟と呼んできておりますけれども、彼はこの時点ではまだ雪舟と呼ばれていないということを御了解いただきたいと思います。「雲谷名は等揚、海東備府の人也」と読みくだせませう。ですから、雪舟は45歳の時の記録では備府の人であって、備前か備中か備後の人かわからないということになります。とりあえず吉備の国の人であるということの間違いありません。それが、 番の『天開図画楼記』という記事によって、これはちょうど「山水長巻」が制作された年の記述ですが、雪舟と号し、「本貫は備之中州の人」で、「姓は藤氏」すなわち藤原氏であるとわかります。つまり、彼が備中の人であるというのは、彼が67歳になったころ、親友によって作られた文章が教えてくれる事実なんです。

それでは彼が備中のどこの出身なのかということになりますと、出身地の具体的な地名が出てくるのは 番の『本朝画史』というものを待たなければならなかったのです。「氏は小田、備之中州赤浜の人也。今に到るも赤浜の田間、雪舟の生まれる所の地有り」となっています。それから、「雪舟十二、三歳に及び、其の父は之を携え」、後に雪舟と号する子

供を連れて、備中の井山の「宝福寺に投じた」とされているわけです。この 番の『本朝画史』の記事が雪舟の生涯をたどるうえでの基本資料になっているのです。それ以後のほとんどの資料といたしますが、雪舟について語っている記事の多くが採用している説、すなわち雪舟は備中の赤浜生まれで、小田氏であること、そして、12～13歳のころに井山の宝福寺に入って修行し、そこで涙でネズミの絵をかいたという定説は、この『本朝画史』の記事によって作りあげられたものなんです。ですから、雪舟が亡くなって大体170～180年とほぼ200年も経過したころ、まとめられた本が基になって雪舟の伝記が構成されているということになります。でも、200年もたっているのだから信憑性が薄いのかといいますと、どうもそうではなかったようなのです。

続いて、『本朝画史』以降の資料を追いかけてみますと、例えば 番の『備中集成志』があります。これは、宝暦3年(1753)にまとめられたもので、その作業にあたった石井了節という人は、赤浜の近く、総社市の黒尾の出身の方です。この本は、いわゆる備中の国の雑誌です。それには「道祐が曰く」とありまして、この道祐というのは先ほどの『本朝画史』をつくるにあたって、恐らく現地調査もしたと考えられる黒川道祐という学者であります。「字は雪舟、當国赤浜の人である」といってますが、『備中集成志』には別の説も出ております。「或は曰う當国・・備中の鷲の森の鵠の橋の東、窪木より五丁ばかり東、高塚村」

。今でも高塚というところがあります。岡山市分に入ったところ。「そこに榎など有りとなん」。ですから、雪舟の生まれたところはここだと称するところが赤浜以外にもあるぞという記事なんです。「亦是同所田中村とも云へり」とも書いてあります。したがって、『備中集成志』編さんのこの段階で備中赤浜のすぐそば、東隣の高塚や北隣の田中も雪舟の生まれたところであると唱える人がいたということを我々は知っておくべきでしょう。ただ、この『備中集成志』、当時の地誌としては非常に評価の高いものですが、雪舟に関する記述の残りの部分は『本朝画史』の系統を受け継いでいて、やはり赤浜で生まれたということをも前提に論を構成していると判断する以外にないようです。

ついでに言えば、その後に『備中志』という 番の記事をのせておきましたが、田中村というところは「中古迄八破出村とも云いしほどに、昔八入組みて此地赤浜村に属せし事も有しにや」と書かれています。つまり、田中村というのは雪舟が生まれたところは赤浜村の一部であったと考えてもいいのではあるまいかというような内容なんです。この赤浜というところは、明日、雪舟の碑のところをお訪ねになると思いますが、周辺は水路が入り組んでおりまして、大変低い湿地帯です。足守川、血吸川、砂川、前川だとか、そういった小さな川が入り組んでおりまして、雪舟が生まれた当時であれば恐らく大雨が降ったらすぐ水を冠ってしまうところだろうと想像されますし、村の境界というのも洪水のたびに動くようなことが、いかにもおこりそうな場所であったような気がいたします。

ともあれ、江戸時代の半ばごろ、1753年ごろは生誕地は赤浜ということで、ほとんどの人が納得していたとみなしてよいように思います。

そして、それを受けて 番目に、『雪舟禅師之碑文』というのがあります。これは先ほど齊藤先生の方からお話がありましたように、藤井高尚という吉備津神社の神官で、有名な国文学者でもあった人が文章をつくりましたものを、これまた当時第一級の学者・文人でありました頼山陽が書にしたものです。この碑を建てることに努力した人物が総社の八田部村、総社のど真ん中にありました豪商の当主、亀山道本という人でした。この宝福寺の碑文は神職がつくったものですから、大変おもしろい文体になっております。いわゆる祝詞のような文章でございます。読みますと、「禅師はこの吉備の道の中の赤浜村というところの布勢屋の小屋の内にあれ出でて」というふうになります。備中の赤浜村で生まれましたということなんです。そして、少し省略がありまして「幼き時」といいますか、「いとけなき時にこの宝福寺に來たり入りよりて、弟子となりぬれど」と文章は続いていきます。ですから、これは赤浜説が前提となっております、その後、「宝福寺にお弟子さんとして來られましたよ」ということなんです。

ただ、赤浜で生まれたということについては、だれも異論をはさまないんですが、宝福寺に入ったかどうかということになると、現在ではさまざまな疑問が投げかけられているのです。雪舟伝説では、涙でネズミの絵をかいたのは宝福寺であるということになっております。だけど、雪舟は子供の時代、まずその宝福寺に入って、その後、京都の相国寺という禅寺に修行に赴くという時間的な余裕があったのかということが、大きな問題なんです。これを検討するにあたっては、雪舟が京都で相国寺に入った年は一体いつなのかということがポイントになるわけです。それを調べていきますと、相国寺へ雪舟の禅の先生である春林周藤とい

う人が住職として入ったのが、これは齊藤先生の年表を見ていただければと思いますが・・・
10ページ、1

1ページですが・・・永享2年(1430)なんです。ですから、雪舟は11歳です。が、翌年、永享3年の

8月ごろには春林周藤は相国寺の住職をかわっております。その後もう一度、その相国寺の中の鹿苑院というところ、そこには日本中の禅宗の寺院を統轄し、そして禅僧の人事を扱う僧録司という事務所が置かれていましたが、そこへ入ったのが、文安4年(1447)からなんです。それゆえ、雪舟が相国寺に入ったとすればこの11歳、12歳のころか、あるいはぐっと下がって27~28歳のころかということになるわけです。

それに対しまして、相国寺には絵の先生でありました周文という人もおります。この人は先ほどのスライドにもありましたように国宝になってる絵もあります。だけど、彼自身は自分でサインひとつ入れていません。判こひとつ入れていません。そういう画家なのです。それやこれやで、この作品は周文で間違いないと断言するのが難しい作家なんです。そうはいつでも制作したいろいろな状況から判断して、これは周文に間違いがないということで、国宝だとか、重要文化財に指定されている作品もいくつかあるんです。

ともあれ、周文の死んだ時期というのものはっきりしないんですが、周文に余り遅い時期

から弟子になったとしたら、というよりも、雪舟が30歳近くまで岡山にいたとしたら、恐らく日本一の絵かきになるような技術の訓練というものは当然できなかっただろうと思います。やはり彼は若いころに相国寺に入ったのではなかろうかと判断せざるを得ないようです。

そして、ここでもう一つ考えなければならないのは、彼が宝福寺、これは京都の東福寺という、皆さんよくご存じの三十三間堂よりももうちょっと南手側にある禅寺ですが、その東福寺の末寺である宝福寺から同じ臨済宗でも系列の異なる相国寺に入り直したのかという疑問については、説明が難しく、明快な回答を出しにくいようです。ですから、最近の雪舟にかかわる本を読みますと、雪舟は赤浜で生まれた、姓は小田である、藤原氏の系統というからには、まず地方の小地主、下層の武士であろう、家を継いでいないから次男か三男だろうというふうにいわれてきています。しかし、その後は宝福寺を飛ばして京都の相国寺に入ったとする説がむしろ主流といえるほどなんです。

しかしながら、私は必ずしもそうとばかりはいえないような気がします。例えば、雪舟よりも1年後に生まれた備前生まれのお坊さん、季弘大叔（きこうたいしゅく）という、やはり禅僧ですが、この方に9歳の時、岡山で出家しまして、それから13歳で上京して東福寺に行っております。お寺に入るとしますと、大体の例を見てましても10歳以下でまずお寺さんの小間使いのような仕事からスタートして、次に京都へ本格的に修行に赴くのは13歳とか15歳ぐらいが多いんですね。雪舟が宝福寺を経由せず直接、それも初めて相国寺に入ったとするならば、スタートの時期が年齢的にやや遅いかなという気もします。

それから、先ほど系列と言いましたが、東福寺系列から相国寺の系列へ移ることがないのかといいますと、ありえないことはないんです。さっきの 之誓鳳なんていう方ですね。

番の資料をのこした人なんかもそうなんです。そのほか、雪舟がつき合っている連中というのは、了庵桂悟をはじめ、結構東福寺系のお坊さんが多いんです。実際、彼の本当の親しい友達というのはどちらかというとなら相国寺系列よりも東福寺系列の禅僧の方が多いし、後々の時代までおつき合いしてるようなんです。

東福寺に入ったあと相国寺に移り直すという例をもう一度考えてみますと、雪舟の場合、そのことを実際にやったとしたら、誕生地の赤浜の北6kmぐらいのところで大井の庄、現在の岡山市大井、足守の大井ですが、そこが京都の相国寺の荘園であったことが関係していると思います。足守川の川下数キロの赤浜に住んでいる雪舟の身内、縁者、その辺を考えますと、彼が水墨画家を目指して京都に出向くとなれば、これはその当時、相国寺に行かなければ一流にはなれないわけです。宝福寺に入って禅の修行を始めていたとしても、どのくらいの期間かわかりませんが、たとえ数年入ったとしても、もう一度やり直すといえますか、本格的に絵の修業に専念するとなれば、相国寺に入り直しても、決して不自然ではない。自分の血縁、地縁、そういったものを生かして相国寺に入り直しても決しておかしくはないというふうには推測されるわけなんです。ですから、雪舟の場合、全くいわ

れもなく宝福寺説が出たとも思えません。

実際、宝福寺で修行したという記事をのせた『本朝画史』という本は、ほかの記事を見ましても信憑性が高いと評価されています。雪舟につきましても、先ほど齊藤先生がおっしゃったように画聖として狩野派が本気で尊敬した人です。その画聖である人の記事をいい加減に書くとはちょっと思えない。十分に調査をして、宝福寺でまず修行をし、それから相国寺に移ったと書いているわけですから、これはやはり無視することはできないのではなかろうかという気がいたします。

ともあれ、相国寺に入りまして、禅の方を春林周藤という、そして絵の方は天章周文という当時の最高の先生、指導者に恵まれまして生活していくわけです。ただ、これもやはり齊藤先生がおっしゃいましたが、彼はいわゆる名門の生まれでもなくパトロンがいるわけでもなく、バックにいろんなものがついているわけじゃないんです。ですから、役職としては知客という、案内役、外来の客の接待役にとどまっていたのです。35～36歳の時、そういう職に就いていたことははっきりしていますし、仲間の禅僧たちは生涯彼のことを知客という職名をつけて呼んでおります。

彼が、京都での生活に見切りをつけて、いつ山口に行ったかということにつきましてははっきりしません。とはいえ、少なくとも齊藤先生の年表にありますように、寛正5年の45歳の時には等揚という画家、まもなく雪舟と号するようになる人ですが、彼が山口にいて、大いに活躍をしていたということが判明しています。そこから先のことは山口の内田先生にお話いただければと思います。

齊藤 孝（岡山大学文学部教授）

ありがとうございました。

それでは、続きまして雪舟がまず山口に登場するわけでありますが、その山口からいずれは入明いたします。そういう入明前の山口での雪舟を取り上げながら、彼が山口にその後もかかわるにつきましては山口の領主であります大内氏というものをしっかりとらえる必要がございます。

改めまして、それでは入明基地としての山口と、そして雪舟の最大の後援者でありました大内氏につきましては、それでは内田先生よろしく申し上げます。

内田 伸（山口市歴史民俗資料館長）

雪舟が山口に来ましたのは、年がいくつの時であったかわかりません。しかし、36～37歳ぐらいだったろうと考えられます。それは、雪舟が45歳のとき、京都から山口にやってきた 之彗鳳というお坊さんが、10年前に京都で親友として付き合っていた雪舟が山口に来て、大変画名が高くなってうれしいと書いた詩文はありますから、それから逆算して、雪舟が山口に来住したのは36～37歳のころであったろうと思われるのです。

山口に来ました理由はよくわかりません。雪舟はいろいろの伝記によりますと、備中の豪族か地主の子供で、次男が三男であったので、寺に小僧にやられたのだと書かれていま

す。しかし、私は次男、三男でなくても、長男でも寺に入ることはあったと考えています。雪舟は小さいときから大変に賢い子供であったと思います。今ごろの親でもそうでありませんが、この子は賢いから将来大成させてやりたい、こう考えていい学校へ入れようと思うわけですが、当時としては勉強をさせるということとなれば、お寺に入れる以外にはなかったわけです。寺以外では、一般の者が勉強し、そして外国に行くことはできません。このようなことで雪舟は、初め近くの宝福寺、さらには京都の相国寺に入ることになります。ここで禅僧としての勉強をするわけです。ところが、実際に寺に入ってみると、将来本当に一つのお寺の住職になれるかどうかということを考えるようになるのです。出身の階級が僧侶の位でも問題になります。出身が余りよくなければ、大きなお寺の住職にはなれんというようなことが、その当時あったようです。雪舟は実力よりもそのような出身の階級を重んじるという京都の寺に多少嫌気がさしたのではないかという見方があります。先ほど話がありましたように、雪舟の知客という役職は、あくまで僧侶の階級的なものでしょうが、雪舟はこのような階級が重視される京都の寺にいるよりも、もう少し自分の力をためてみたいと思うようになったと思われまます。

そのころ京都は大変で、まだ応仁の乱より前ですけれども、すでに京都の治安は乱れ、幕府の力は全くないという状態でした。そういうようなことですから、雪舟はこのように京都で禅を修行し、画を描くということは、まずできないという気持ちを持っていたのではないのでしょうか。それで、それならどっかいい所へ行こうというようなことになったときに、山口を選んだのだらうと思われまます。それは、山口は京都よりも平和でありますし、そうして友人であった牧松周省（ぼくしょうしゅうしょう）が山口にいたからだらうと思われまます。周省は山口の豪族大内氏の出であるといわれています。そしてもう一つの原因は、山口の大内氏が遣明船を出しているのです、山口に行って遣明船に乗って明へ渡ってやろうという気もあったのでしょう。

山口は雪舟が来るよりも100年ぐらい前、南北朝の初めごろに大内氏という豪族が山口に居館を構え、政治を行っていました。大内氏は周防の役人でしたが、段々勢力を得まして、周防の守護、さらに長門の守護も兼ね、後には西国7カ国の守護となります。その大内氏は、朝鮮さらには大陸の明とも交易をしまして大変な財をなします。室町中期ごろになると、京都の将軍、天皇をしのぐほどの財力、勢力がありました。

雪舟が山口へ来た時、大内氏の当主は大内教弘（のりひろ）でした。教弘はすぐれた文化人でもありましたから、京都からは雪舟のほかにも多くの文人墨客が山口を訪れていまます。雪舟が山口で居を構えたところは雲谷庵という小庵ですが、これは今でも山口に残っておりまして、史跡に指定されています。ちょっと山の裾の小高いところにありまして、完全に山口盆地が見える、なかなか眺めのいいところですよ。現在は近くまで家が建ちまして昔の風情がありませんけれども、つい戦後までは、周囲にぼつんぼつんと農家があるぐ

らいのところでした。

先ほど言いました 之慧鳳が雲谷庵にやって来まして、『京都でかつて友人であった雪舟が、(その当時はまだ号を雪舟とは言っていないで、雲谷等揚とっていましたが、)山口に庵を結んで、将来ここで過ごそうとしている。この雪舟、雲谷等揚の名は、子供やあるいは身分の低い武士らにもよく知られていて、大変うれしいことである』と記していますが、雪舟は山口に来ましては、精力的に画を描き、多くの人々にも名をよく知られていたようです。

雪舟がとうとう憧れの明に渡りますのは、48歳ぐらいの時でした。実際に明に渡るということは当時は大変でした。人生50年といわれる時代に、48歳になってでも明に渡るという雪舟の気持ちは尊いものです。当時、東シナ海を船で渡るということは、まことに命がけであります。そうまでしても明に渡って、禅の本場であり東洋画の本場である大陸でその蘊奥(うんのう)を極めたいという雪舟の決心は強いものでした。

雪舟が乗った大内氏の遣明船は、天候や風などの一番条件のよい時を選んで出航したのですが、途中で暴風雨に遭いまして、船は壊れました。そこで一応五島の奈留にもどり、そこで修理をして再度明へ向かうということになります。雪舟は本当に身命を投げうって、禅の奥義、東洋画の奥義を得たいとしたのです。

斉藤 孝(岡山大学文学部教授)

雪舟の入明前の大内氏との関係を事細かにお話ししてくださいました。

雪舟はこれから明へ渡るわけですが、彼が明という国でどういう業績もあり、またどういう修行をしたかという具体的な問題につきましては、また取り上げるべき問題ではあるんでしょうけれども、時間の都合もございますので、一応今回は日本での雪舟の段階に一応抑えさせていただきます。

そうしますと、雪舟は応仁元年に48歳で中国へ渡りまして、文明元年に50歳で日本へ帰ってまいります。その後、彼が次から次へ流浪いたしますが、その最初に取り上げるべきは九州での雪舟でございます。

九州からは渡辺文雄さんに来ていただいております。渡辺さんから九州での雪舟の活躍をお話ししていただきたいと思っております。

渡辺文雄(大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員)

先ほどから入明の話がありましたが、雪舟は文明元年(1469)50歳の時に明から帰国しております。内田先生からもお話がありましたように、この時の遣明船は三隻ありまして、幕府船、細川船、大内船であります。このうち、幕府船、細川船は応仁の乱、その当時周防の方にも内乱があった訳ですが、こういったものを避けまして九州の南を迂回しまして土佐に上陸しているようであります。そして、雪舟が乗った大内船の方は筑紫、おそらく博多であろうと思っておりますが、そこに上陸しているようであります。それで、雪舟は、その後大分に赴くことになるのですが、その前に一時期、以前から親交のありました

牧松周省、大内教弘の子息であります。この方のもとに身を寄せたのではなからうかと考えられます。いずれにせよ、文明5年(1473)雪舟54歳の時であります。山口に在りまして医学者の安世永全(あんせいえいぜん)という方の肖像を描いておりました。この関係によって、文明5年には明らかに雪舟が山口の地にいるということがわかるわけです。翌文明6年、雪舟55歳のときですが、彼の高弟であります如水宗淵のために山水小巻(山口県立美術館)を描いておられます。これは、中国の高彦敬(こうげんけい)が描く山水画を模したものですけれども、雪舟が巻物という横長の画面に初めて山水画の構想を定着させた記念碑的作品であります。その後、雪舟はどうも大分、府内の地に赴いたようであります。

雪舟がいつ府内に赴いたのかははっきりわかりませんが、明らかに府内に居るといのがわかりますのは文明8年(1476)であります。これは先ほどの齊藤先生のお話の中にも出てまいりました、古くからの雪舟の親友であります呆夫良心という方が記しました「天開図画楼記」、これが文明8年3月の日付をもっておりました。この時には明らかに雪舟が豊後府内の地に天開図画楼という画房を開いて、そこに居住していることがわかる訳であります。なぜ、雪舟が山口の地を離れて府内に赴いたかという理由は色々と考えられると思うんですが、当時、先ほど申しましたように応仁、文明の乱のあおりを受けまして周防の山口の家中にも内紛がありました。当時、大内政弘は、上京中でありまして、その間に政弘の伯父である大内教幸が長門の赤間関に挙兵し、大内本家に反旗を翻すということがありまして、周防の地も戦乱の巷と化していたと想像される訳です。では、雪舟がこういう地を離れて、なぜ大分を選んだかということですが、当時の豊後は大友氏の15代親繁、16代政親の時代でありまして、その居城があった大分府内の地は比較的平穏な時代にあったことが考えられます。そして、府内の地は、天開図画楼記にありますように非常に山海の眺望に富んでおりました。その風光は、入明以来中国の自然の中には山水の極地をみてきた雪舟にとってまたとない土地柄であったろうと考えられる訳であります。しかし、そういった消極的・間接的な理由よりも、まさに積極的な理由としましては、当時の府内は九州にあって有数の臨済禅のメッカであったということです。先ほど東福寺の話がでましたが、その東福寺派の東九州におきます中枢をなした禅寺に万寿寺というのがございまして、南北朝期から室町時代を通しまして10刹に数えられた名刹であります。これは、徳治元年(1306)に大友5代の貞親が開いておりました。東福寺の開祖聖一国師の弟子直翁智侃(じきおうちかん)を招請して開いたお寺でございます。その歴代住持の中には寂室元光(じゃくしつげんこう)であるとか中巖円月(ちゅうがんえんげつ)あるいは雪村友梅(せつそんゆうばい)などの多くの名僧が歴住いたしております。こういった府内における禅宗界の状況というものが考えられるのではないのでしょうか。そして、雪舟がこの地を選んだ最も大きな理由としては、雪舟とは早くから親交のありました桂庵玄樹という方、この方は雪舟と一緒に入明いたしておりますが、この方がこの当時、府内の万寿寺に住持していたということがありまして、この桂庵玄樹を頼って雪舟が府内の地

に赴いたと考えられるのであります。では、天開図画楼というアトリエはいったい大分のどのあたりにあったのか、非常に問題になるところなのですが、いろいろ諸説がありまして、資料の次のページをご覧くださいと思います。

左に地図を載せてありますが、大きくは2か所ほど、上の方の地図の1番が囲んであるところ、ここが上野が丘という台地であります。上野が原と言ったこともあります、それからもう一か所は、2番の西大分の背後の丘陵地です。大きく分けて2つの説がありますけれども、有力なのは1番の上野が丘台地といわれるところであります。それはなぜかと申しますと、呆夫良心の『天開図画楼記』をご覧くださいなのですが、その冒頭に「画師揚公雪舟は、勝地を豊府西北の隅に相いして一小楼を創作し、傍に題して天開図画と曰。滄海前に接し、群峰後に連なる。孤城左に聳え、二水右に流れ、位置勢拝、千変万態なり。天即ち神品を留む。以ってこの境に開帳するにあらずば何ぞや。顧るに其れ楼上の景致を以って、此を公の筆跡に擬らえば天即ち太山（たいざん）の丘埵（きゅうし）に於ける類也」という記載がありまして、天開図画楼は、この豊府の西北隅にあって、前方には広々とした海がある、これは別府湾のことですが、「後ろには群峰が連なり」これは大分市街地の後方にあります霊山（りょうぜん）あるいは九六位山といったような連山であります。そして、「左には孤城が聳え」これは例のおさるの高崎山であります、これは中世には高崎城という山城がありまして、そのことを指しているのではないかと思います。そして、「右には二水が流れ」というのは、現在大分市街の東を流れております大分川、あるいはその支流であります浦川、この二水を指しているのではないのでしょうか。

こういう天開図画楼記の記載からしますと、先ほどの二つの説のうち2番の方は、ここからですと高崎山の真下でかえって見えないということでもあります。それで、1番の上野の丘台地ですが、下の図はその拡大図ですが、ここは非常に場所として良いということでもあります。なぜならば、ここにあります 番ですが、このあたりは先ほど申しました桂庵玄樹が住持していた万寿寺があったところでもあります。現在、万寿寺は江戸初期に 番の所に移りまして、金池町というところにあるんですが、古くはこの 番の地にありました。そして、その南の方 番のところが大友氏の居館の跡であります。

こういった大友氏との関係、あるいは万寿寺との関係を考えたときに、やはりそういった近いところにアトリエが築かれても自然ではなかろうかと思われるわけでもあります。その上野が丘台地の中でも、 番これは金剛宝戒寺という、現在は真言宗でございますが、古くは真言律宗だった寺があります。そこには、昭和27年に雪舟の没後450周年を記念いたしました顕彰碑が建っております。しかし、この 番は左の方のちょっと出っ張った丘が邪魔になって高崎山が見えないんです。それから 番のところですが、ここには現在九州電力の変電所がありまして、このあたりという説もあります。しかし、これはちょっと下がりすぎて、左に高崎山、右に大分川、浦川の二水がなかなか望みにくいわけでもあります。高崎山が見えて、二水を眼下に別府湾が眺められるというのは左の 番のあたりです。場所としては、このあたりがもっともいいわけですが、しかし、何処だという断言

はできません。現段階では、このあたりのいずれかの地であっただろうという程度に留めておきたいと思います。

では、雪舟の天開図画楼での活動はどういうような状況であったということですが、先ほども斉藤先生からお話がありましたように、上は公候貴族から下は僧侶、工商の民に至るまで雪舟の絵を求めて訪ねるものが非常に多く、ついには門を閉ざさざるを得なかったというような非常に多忙な状況にあったようです。その画室を見れば絵の具箱や画筆の類が雑然と散らばり、大小の紙絹は棟に充つるほどで、表装したものは壁に掛け、あるいはひねもす、絵の具を溶かし描くこともある。精神に疲労を覚えた時は欄干に寄りかかって休息し、衿を開き風にあたって気分をかえたという。こういうまさに画事三昧の生活を送っていたということでありませう。

その間、天開図画楼に居た間に雪舟が描いたであろうといわれております作品に鎮田瀑布図というのがあります。その原本は現在失われているわけではありますが、狩野常信が模写したものが京都の国立博物館にあります。これを見ますと、現地、大分県大野郡の大野町というところに沈墮の滝という雄滝・雌滝二つの滝があります。雄滝の方は現在九州電力の発電所等でダムになっておりまして、昔の景観は見られないわけですが、雌滝の方は実際今も残っております。そういったものと雪舟の鎮田の瀑布図とを比較してみますと、雪舟が我が国におきまして真景図を初めて描いたということですが、必ずしも沈墮の滝そのものを画面にそのまま筆写したわけじゃありませんで、現在の写生と申しますと、実際のモノを見るままに描くということですが、雪舟の真景図の場合は、そこに非常に雪舟独自の翻案が入っているようでありませう。鎮田瀑布図の横長の画面の中には、雪舟がとらえた鎮田の滝の姿というものが、実際の沈墮の滝は雄滝と雌滝の間がかなり2～300m距離が離れておりまして、一つの画面の中に定着しているところに雪舟の翻案部分があるわけでありませう。又描き方にしましても、先ほどもお話がありましたが非常に力強い、いわゆる楷体描という硬い筆跡でくい込むように岩肌を表現するという、雪舟が中国で得た画技、そういったものが雪舟独自の画風に展開していく最初の形成期にあるんだということが分かるわけでありませう。そういう意味で鎮田瀑布図は、雪舟の真景図の最初のステップとしての記念碑的作品ということができると思います。

そういうことで確かに雪舟は大分に天開図画楼というアトリエを開いて作画活動を行い、その間大野町の沈墮の滝を見て鎮田瀑布図を描いたことは確かであろうと思います。

では、その雪舟がいつごろ大分の地を去ったかということですが、これもはっきりとしたことは分からないのですが、恐らくは『天開図画楼記』の書かれた文明8年(1476)3月前後じゃないかと考えられるわけですね。これについては、先ほどもふれました雪舟が大分に来る契機となりました桂庵玄樹が記しております『島隠漁唱』という記録がありますが、これに「文明八年六月朔日、予豊城の乱を避け筑後に入る」とあり、桂庵玄樹は天開図画楼記を書いた3か月後に豊後府内の地を離れて筑後に赴いているのです。この時の豊城の乱というのは、大友氏の内部でちょうどこの頃家督相続をめぐる争いが起

こりまして、16代政親とその嫡男の親豊の不仲による家督争いなのですが、これにつれて国内も両方に分裂するということがありまして、豊後の地もまた戦乱の巷となるわけがあります。こういったものを避けて、桂庵玄樹が豊後の地を離れていったことにより、雪舟もまた盟友桂庵玄樹がいなくなった豊府の地をほどなく去っていったのではないかと考えられるわけがあります。

このほか、大分を中心とした雪舟とのかかわりでございますが、色々大分県内にも雪舟が関係したと伝承するものがいくつかあります。まず、大分県内ではありませんが、英彦山（ひこさん）に亀石坊というところがあり、その庭園ですが、これは、雪舟作庭という伝承をもっております。それ以外にも、県内では速見郡の日出（ひじ）町の松屋寺（しょうおくじ）というお寺に雪舟が造ったと言う伝承の庭園があります。それから大分県の西北部、日田郡あるいは日田市という所に雪舟作庭という伝承をもった庭園が点々と、まあこれは、あったと言った方がいいんでしょうが、早くに無くなっている所が多いようです。雪舟がそういった所へ赴いたという確証はありませんが、豊後に立ち寄っている以上、そういう伝承も無視できないところがあります。

それから、雪舟の後継者たちの中にあつて、豊後あるいは、九州関係の人たちがどの程度いたのかということですが、雪舟のお弟子さんたちのことを記したものはそう多くはなく、よく参考にされるのは、『古画備考』というものに記載されている雪舟画系、それから『本朝画史』に記載されている画伝の類がありますが、特に面白いと思われまますが、近年紹介されました博多の崇福寺（そうふくじ）の江月宗玩（こうげつそうがん）の手記になる『画師の伝宗派図』というものであります。これ自体は、江戸初期の寛永年間に書かれたものであります。それなど見ますと、かなり九州関係の人が出ております。各画人の前後関係にどうも微妙に食い違う疑問のところもあるのですが、一応これに従いますと、雪舟の直弟子とみられます10名の中では、豊前英彦山実円坊の等琳（とうりん）、それから豊後出身の等恕（とうにょ）、それから同じく得受蔵主がいます。この人は、伝承では、日田の岳林寺に住持たことがあるというようなことを伺っています。それから同じく豊後の僧周孫があり、それに継ぐ弟子たちとして、肥後の僧等快、或いは豊後の僧等本、薩摩の僧承虎、大隅の人等観などの名前が見えております。特にこの中で重要なのは、秋月等観でございますが、この方は雪舟の様式を正當に継承した代表的な画人として知られる方でございます。延徳2年（1490）雪舟から71歳の自画像、これは大阪の藤田美術館に模本がありますが、これを贈られております。また、明応2年（1493）から同4年にかけては雪舟と同じように入明もいたしております。そして、滞在中に雪舟の揚子江図鑑に倣いました西湖図（石川県立美術館）を描いております。そのほか等観の作品としては、岡山県立美術館に芦雁図、白鷺図などが残っております。雪舟の画系を正統に継いだということで、秋月等観は非常に重要な方であると言えるわけがあります。以上とりとめもない話になりましたが、豊後を去りました雪舟は、まもなく益田の地に現れるわけがあります。

齊藤 孝（岡山大学文学部教授）

ややちょっと時間が進んでおりますので、引き続きまして九州、豊後から離れますと、続いて雪舟は益田に登場いたしますので、矢富巖夫先生、今度は引き続き益田市と雪舟のかかわり合いをお願いいたします。

矢富巖夫（益田市雪舟の郷記念館長）

大分にいました雪舟は、応仁の乱が終わり世の中が平静を取り戻しますと、やがて益田に参ります。益田に来た理由としまして、まず雪舟は旅が好きだったことです。あの芭蕉が「旅に病んで夢は枯れ野を駆けめぐるといって亡くなりましたが、その芭蕉が自分の先生は雪舟だと言っております。雪舟は、旅によって禅を切り開いていく、その反面絵を開拓するという、そういう人でありますから、なるべく新しい土地を求めて歩くというふうなんです。だから、大分から山口へ帰った後、新天地の益田へ参ります。また、益田兼堯と陶弘護（ひろもり）は大変な親戚で、雪舟が来たころ、益田城主第15代の益田兼堯でした。この益田氏というのは、石見一円に大変武を誇った武士であります。もともと平安時代の終わりに、石見国司として入ってきた御神本（みかもと）氏なんです。その御神本氏が自分の国司の任が終えても帰らずに、役人をやめて武士になっていくんです。そして、4代益田兼高のときに、石見の国府から益田城に移ります。そうして、石見一円に武を誇るんです。その後、室町時代になりますと、大内氏の傘下に入ります。そうすると、益田氏は何とかして大内氏に取り入らなければなりませんから、どうかして縁者を求めようとして大内氏の家老であります陶弘護と縁を組んだのです。益田兼堯の娘さんが陶弘護の夫人になるんです。そして、その陶弘護と夫人との間に生まれた娘さんがまた益田の17代宗兼の夫人になるという、つまり益田と陶さんとは重婚の仲なんです。雪舟というのは、この陶弘護の肖像をかいております。山口で雪舟の世話をしたのは大内政弘よりは、その家老の陶弘護だと思うんです。その陶弘護が、自分の家内の里は益田なんだが、雪舟さん益田へ行ってみないかというようなことで、まだ踏んでいない山陰の地を訪れることになったんです。益田市民は、雪舟のことを雪舟さんと言っています。これは、私が幼時のころから父も母も雪舟さんと言っていました。恐らくその昔から雪舟さんとさんづけでいわれたと思うんです。こうした益田のかかわりというものは、ともかく雪舟さんが亡くなられて以来ずっと続いていると思います。

では、その益田兼堯なんですけれど、先般益田市は、国の重要文化財、雪舟筆益田兼堯像を購入しました。この益田兼堯像を見ますと、図の上に竹心周鼎（ちくしんしゅうてい）が書いた賛文がついています。これは、同じ益田市内の山寺東光寺のお坊さんなんです。このお坊さんが、この雪舟のかいた絵の上に何を書いたか。これは、上の二、三行の文字がはげてわからないのですが、益田氏は非常に幸せな家庭だ。当時、15代兼堯、16代貞兼、17代宗兼と殿様が3代そろっていた。応仁の乱には、宗兼が行くし、また大友道頓の乱には、このおじいさんの兼堯が陶弘護とともに戦って九州で道頓を取るというように、非常に益田氏と陶氏は仲が良かったんです。兼堯が一言言うとだれもが納得する。一

度剣をふるうと万民の恐れおののくと記してあります。この絵は、益田の家臣の美濃守信為が小庵を建てたときに、この兼亮の像を床の間にかけて、日夜香をたいて拝んだというのです。そこで、竹心が自分は文が下手ではあるし、断っても断っても断りきれないから、仕方なくこの上に拙文を書いたと書いてあります。これが文明11年です。雪舟60歳のころです。もちろん、竹心周鼎は益田市内のお寺にいましたから、この絵と同時にこの賛文が書かれたのもいいと思います。こうした絵が、幸いに益田市に入りました。

また、これとほぼ同じところに四季花鳥図屏風というのをかいているのです。これは、益田城第17代の益田宗兼が家督を相続するときに、雪舟が祝いのために書いたものです。非常に多幸な、おめでたい絵がかかれております。

また、雪舟さんは、益田に庭を2つつくってくれたんです。しかも、その2つの庭がまるで違った印象を受ける庭なんです。万福寺の庭では寺院様式庭園と言います。だから、中央に須弥山（しゅみせん）という小山を置きまして、その小山の上に須弥山石を立てております。そして、須弥山石の左側に何ともいえないとがった石が西の方を向かっておるのです。あのアンバランスな石を安定させるために、上部の須弥山石は右側へ曲がっていてバランスをとっておるんです。雪舟さんはたくさんの石を使っておりますが、非常に安定がとれております。須弥山石の下は心字池なんです。そして、枯れ滝石組みを東側につくっております。こういった万福寺の雪舟庭園は、非常に平面をうまく利用した立派な寺院様式庭園なんです。

もう一つ、医光寺庭園は、武家様式庭園と言いまして侍用の庭なんです。侍用の庭だから、おめでたい庭にしようというので、鶴亀庭にしたのです。池は鶴池、ちょうど鶴が空を飛んでいるような格好で池を作っております。その鶴池の真ん中に亀島を浮かべました。亀は一目でもうすぐわかるんですね、どこが首が尾っぽで足だというのがわかります。この亀島の背中に三尊石を乗せておるんです。中心石の後ろに三尊石を乗せております。

このように、雪舟さんは益田で対照的な2つの庭をつくっている。だから、お客さんがどちらがいい、どちらが悪いと言えるわけなんです。まるで違うから。万福寺の方は非常に平面的、こちら医光寺の方は山の裾を利用しているから、見ようによっては立体的なんです。片や平面、片や立体、片っ方が明るければこっちは幽艶だと。そして、この医光寺の庭の上には柳のような桜があるのです。糸すだれと言いまして、柳のような桜が春風にゆられて、非常に庭を美しく彩っております。

万福寺は、昔は磯馴れの松があったんですが、松くい虫でやられました。万福寺の方は蓮の花が咲きます。医光寺の方は蓮の葉があっちはいけないんです。このように、まるっきり違う庭を2つつくってくれたということは益田市民にとって、また日本人にとって非常に幸せなことだと思うんです。

また、同じところに山寺図というのをかいています。この山寺図にいろんな説がある。山形県の立石寺の山寺じゃないが、あるいは岡山県の重玄寺の辺じゃないかといろいろ言われておりますが、この山寺図をよく見ますと、もし山形県の立石寺だったら、厳しい山の

てっぺんに釈迦堂だとか五大堂だとか、そういう寺が絵の中に見えなければいけないわけです。ところが、この山寺図にはそういった厳しい山はなくて、比較的低い山があり、そして真ん中辺に伸びやかな田園があるんです。山形県へ行きますと、とてもとてもそういう田園はありません。仙山線という鉄道と道路があるだけで、平野というよりは筋ですよ。恐らく、益田平野の伸びやかな田んぼ、そして低い山を描いたものであります。その上に山の上にお寺はないとなると、これは益田風景なんですね。田んぼの真ん中に鳥居があります、これ石勝（いわかつ）神社の鳥居、そして左側全体に山寺東光寺をかいています。山寺東光寺というのは、今言いましたような益田兼堯の図の上に賛を書いた竹心周鼎のお寺なんです。今大喜庵と言いますが、大喜庵の前が山寺東光寺、この大喜庵付近をかいたのが山寺図なんです。

こういったように、雪舟は60歳前後に兼堯像、そして四季花鳥図屏風、山寺図、さらに2つの庭をつくっております。こうして山陰道を上がりまして、温泉津の辺から船で丹後に上がったんだと思うんです。そして、後年山口に行きました。

ところが、雪舟は晩年益田に来て亡くなっているんです。いつ来たかわからないのです。山寺東光寺の竹心周鼎が山口の方に引っ越して、その寺があいたから、その寺の後に雪舟がやってきた。その山寺東光寺付近は、つまり今の益田平野なんです、あの益田平野は当時一面の水郷でした。山寺図にかかっている田んぼは、ちょっと益田平野の山懐の辺の平野なんです、益田平野は当時は一面の水、氾濫源だったのです。高津川と益田川の2つの河川が、暴れまくり、堤防がないもんだから、益田平野は一面の水郷だったのです。こうした山寺東光寺から眺める益田平野は、ちょうど中国の風景によく似てる。彼は昔、天童寺へ参りました。その天童寺、寧波といった杭州付近の水郷に非常によく似ている。益田に行けば、ある水郷が眺められるというので、雪舟さんは晩年になりまして山口から益田に上がってきたんだと思います。そして87歳、1506年、益田で亡くなります。益田には、その墓があります。そして、大喜庵の隣に硯水靈巖泉という泉があります。こういった雪舟の墓と、硯水靈巖泉、つまり雪舟さんが晩年のすずりの水に使ったり、あるいは茶の湯に使ったりした泉、そして山の上の小丸山古墳、そういった一体を雪舟山水郷という大きな文化ゾーンにしまして、その核にことしの10月に雪舟の郷記念館ができました。ヒノキのおいがぷんぷんするような、真新しい記念館なんです。記念館の中を回廊が通っておりまして、そして雪舟の墓やあるいは山寺東光寺の後進である大喜庵だとか、大喜庵のそばの硯水靈巖泉だとか、そういったものがすべて見られるようになっています。

益田市民の雪舟に対する熱意というのは、また物すごいんです。ただいま益田市長が申しましたように、三度も雪舟顕彰会というものが行われているんです。

大正15年、第1回目の雪舟顕彰会が発足しました。当時益田出身の潮恵之助（うしおしげのすけ）という内務大臣の音頭で、日本画家たちから献金を求めまして、そして大喜庵がすたれたのを直したことがあります。これが大正15年です。そのときに、今の芸術大学、当時東京美術学校の校長室にありました、高村光雲作雪舟像という木像と天開図画

楼図という名画などの寄贈を受けました。こうして昭和になりまして、戦争に突入すると、大喜庵はすたれるばっかしなんです。ここでこれをすたらしては大変だということで、第2回目の顕彰会が発足し、さらに最近第3回の雪舟顕彰会、会長は市長であります、発足しました。この時、雪舟に関するものは何でも複製にしようじゃないかという話になりました。四季花鳥図屏風は東京にあるけれど、何しろ500年前のものだからぼろぼろですね、とてもとても持ち出せません。益田の市民の皆さんこの際思い切って複製に見せようということで複製を作りました。さらに、山寺図も複製にしました。だから、日本唯一の複製ということになります。こういった複製が、全部この記念館にあります。そうした顕彰会の熱意というのが益田市民にどんどん伝わりまして、最近この記念館が竣工しました後は市民の皆さんが押すな押すな、もうひどいときは一度に300人も入りまして、絵を見るどころか、人の汗ばっかりにおうというような状況が起こったわけです。このように、益田と雪舟さんのかかわりというのは非常に古くからありましたことから、益田市の皆さんもこのように記念館を訪れるのだらうと思います。

斉藤 孝（岡山大学文学部教授）

どうもありがとうございました。

その後、益田から雪舟はさらに日本全国の流浪を続けますが、67歳以降、終えんの地を改めて山口に求めるわけでございます。そして、山口に定住の道を据えましてから、ますます雪舟の芸術は大きく花開くわけでございます。その後の彼の人生を、改めましてもう一度内田先生からお話を伺います。

内田 伸（山口市歴史民俗資料館長）

雪舟は37歳ごろに山口に来まして87歳で死ぬまで約50年間、山口を根拠として絵をかいております。もちろんこの間周防・長門の国一帯あるいはさらに日本全国を旅行して絵を描いています。雪舟は、絵を描くことは写生を根本としなければならないと考えていたようで、弟子の宗淵あてに出した手紙の中に「ただ目前の景色は皆絵の師に候」という言葉を書いております。目前、目の前の景色をよく見なさい。それが絵の先生だ。だから、よく写生をしなさいといっています。師匠の筆致のまねをするのが絵の勉強ではないということだと思います。雪舟が弟子にそのようなことを言っておるのを裏付けるように、雪舟は明に行った時も多くの地の写生があります。日本に帰ってきましてからも、全国各地を広く旅行して多くの写生をしています。先ほど話のありました九州大野の沈墮の滝、あるいは富士山、出羽の山寺、但後の天橋立、そのほか多くの真景図が残っておりますが、それらの絵を見ると、雪舟は多分に写生が一番大事なことだと心掛け、写生をもとにあのような絵ができたのだとわかります。

雪舟は中国明から帰ってきて、一時山口の雲谷庵に落ち着きましたが、その後間もなく大分の方へ行っております。大分には数年いたようですが、再び山口の雲谷庵に帰ります。そして、60歳を過ぎて2年間を超す大旅行に出ます。それは、京都、美濃、東海道、鎌倉、出羽、北陸、丹後を回る行程であったと考えられます。大旅行を終えて帰ってきた山

口の雲谷庵には数人の弟子が待っていたと思われませんが、雪舟はこの後はその弟子たちに囲まれて、充実した日々を送っていたようであります。

現在、山口県防府市の毛利博物館に残っております雪舟筆の山水長巻は雪舟の第一の傑作であるともいわれていますが、それは雪舟が67歳のとき、文明18年に山口の雲谷庵で描いたものです。長さ15mという大変長い画卷の一番あとに「文明十八年嘉平日に天童前第一座であった雪舟等揚が描いた」という落款があります。天童第一座というのは、中国寧波の天童寺で第一番の位、首座（しゅそ）であったということです。天童寺は中国五山の一つで、この大寺の首座になったのは日本人では雪舟が唯一人だけです。雪舟には天童第一座の落款を書いた絵がこの山水長巻よりほかにいくつもありますから、雪舟は天童第一座という位を誇りにしていたようです。

雪舟筆として残っている絵の多くは、山口の雲谷庵で描いたものと思われませんが、残念なことに山口県には、現在そうたくさん雪舟の絵は残っておりません。山口の古いお寺や由緒ある旧家に行きますと、必ず2、3点の雪舟筆という絵があります。しかし、それが雪舟の本物かどうかということになると難しいことです。よく雪舟5点説という話がありまして、雪舟の研究家が皆、これは雪舟筆に間違いのないという絵は5つぐらいしかないといわれたりしています。しかし、こんなからい点をつけることはないでしょう。雪舟は30歳ごろから87歳で死ぬまで絵筆一途に生きてきたのですから、恐らく数千点の絵を描いたと思われまゝです。ですから、雪舟の絵は500年を経た現在でも、まだまだ残っていてよいわけです。いま伝雪舟といわれる絵の中に雪舟の正筆がまだまだあるように思われまゝです。

雪舟が67歳の時、山口の雲谷庵に友人の了庵桂悟がやってきまして、雪舟のために「天開図画楼記」を作っています。これを見ると、アトリエ雲谷庵のありさま、雪舟の生活状況、執筆態度などがよくわかります。文中には賢大守、すわなち大内の殿様も時々訪れているとありますから、大内政弘、義興などが政務の余暇にここに来ていたことがわかります。雪舟は東遊から帰ってきてここ雲谷庵に落ち着き、以来20年間、弟子たちに囲まれて画筆をとり続けていたのであります。

雪舟はどこで死んだかということは、今お話がありました益田の大喜庵、あるいは岡山の重玄寺、さらに山口の雲谷庵というふうないろいろな説があります。私は当時、山口が一番平和な土地でありましたので、山口で87歳の生涯を閉じたと考えべきだと思っています。

山口の人間である私は、雪舟に大変親しみを感じています。雪舟は明から帰ってきますが、普通なら命がけで留学して帰ったのですから、今度は中央の京都に行って、京都で自分の技量を発揮するというのが普通の考えです。ところが、雪舟は京都をめざさず、帰朝後も山口へとどまります。すなわち雪舟は、山口こそ芸術家として居住するに一番良い所であるとするのです。私はよく山口の人に、世界的な大芸術家雪舟が、50年間も山口に住んだということは、山口が芸術の心を育てるのに一番ふさわしいからであろう、私たち

は雪舟をさらに深く学び、雪舟の愛した山口の地を再認識しなければとっています。

山口には、雪舟庭と呼ばれる有名な庭園があります。正式には常栄寺庭園といって、国指定の史跡名勝となっています。ところが、山口県にはこのほか俗に雪舟庭という庭がいくつもありまして、山口市内にも3か所あります。山口県下には10か所ぐらいあります。どれが本当の雪舟庭かという、なかなか難しいです。雪舟研究家の中には、雪舟は庭を築いたことはないという人もあります。しかし、常栄寺庭園は室町時代中期の作庭ですから、雪舟が山口にいたころの庭ということにはなりません。雪舟庭には、まだいろいろの問題があります。

雪舟が死んだ雲谷庵は、その後は弟子の等悦や周徳らが後を継いで守っていたようですが、大内氏が陶の乱で滅びてしまいますと、雲谷庵も荒れてしまったようです。山口を毛利輝元が治めるようになると、輝元は雪舟の画系の存続を考えます。ちょうどそのころ、肥前の武士、原治兵衛直治というものが、雪舟の画風をよくするというを聞いて召し出し、雲谷庵の跡地及び雪舟の描いた山水長巻を与えて画系を継がせます。原は雲谷等顔と名を改めて、雪舟画統四世を称して毛利家に仕えます。この雲谷家は江戸時代には6、7軒に分かれて毛利家に仕え、雪舟画系を伝えてきました。

雲谷庵の跡地は、江戸時代には雲谷本家が守ってきませんが、明治になりまして藩籍奉還後は、雲谷家はこの雲谷庵跡を民間に売ってしまいました。そして、そこは畑になってしまいましたが、明治14年、近藤清石という郷土史家が、雪舟ゆかりの地がこれではわからなくなるであろうからと、その畑を買い取り、近くのお宮、お寺の廃材を集めて堂宇を建て、雲谷庵としました。それで、現在山口にある雲谷庵は雪舟がおった時代のままのものではありませんが、その雪舟ゆかりの雲谷庵跡を訪れると、画聖雪舟の心にふれる思いがいたします。

斉藤 孝（岡山大学文学部教授）

本日のシンポジウムは、雪舟が生涯にわたって業績を残しました各地から代表が来ていただきまして、それぞれの実情をお話ししていただく形で、このシンポジウムの計画が行われました。

また、もっといろいろ皆様方からのお話し合い等も本来のシンポジウムという形でありますとすべきところでありましょうが、実は我々に与えられましたシンポジウムの時間がちょうど参っております。したがって、一応このシンポジウムはこの時間で一応まとめさせていただきますと思います。

まず、パネラーの皆様方におきましては、大変それぞれの地域のことにつきましてはうんちくが深く、いろいろ話したい、伝えたいと思われることが多々おありであったかと思いますが、コーディネーターに御協力いただき、それぞれきわめて適切に、簡にして要を得たお話によりまして、我々一同に非常にわかりやすくお話ししていただき、かつ時間以内におまとめくださいました。その御協力のことを改めてコーディネーターの側からお礼申し上げたいと思います。あわせて、今回のこのシンポジウムに対しまして、かくも

多くの皆様が熱心に最後まで我々の話を聴講していただきましたこととお礼申し上げます。今回のシンポジウムを閉じさせていただきます。

ありがとうございます。

司会

ありがとうございました。

パネラーの皆様方本当にお疲れさまでございました。ありがとうございました、貴重なお話を。

コーディネーターをお務めくださいました斉藤先生、ありがとうございました。お疲れさまでございました。

以上をもちまして本日の行事をすべて終了させていただきます。

会場の皆様方、本日は長時間にわたりまして熱心に御聴講いただきまして本当にありがとうございました。厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。(拍手)